

2021年11月21日 礼拝説教要旨
詩編講解説教86 「一筋の心を」
詩編86：5～13、ルカ11：1～4

詩編第86編は個人の嘆きの祈りとなります。この詩編の特徴として、多くの学者が口を揃えて述べているのは、この詩編第86編は、他の詩編や聖書の言葉によく見出される表現が多数含まれているということです。例えば6節は詩編55編の1節「神よ、わたしの祈りに耳を向けてください。嘆き求めるわたしから隠れないでください」によく似ています。7節も50編15節「それからわたしを呼ぶがよい。苦難の日、わたしはお前を救おう」に通じています。また5節は出エジプト記第34章6、7節「主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す」ここに通じていると言われます。つまりこの詩編は様々な祈りの言葉、聖書の言葉の選集と言ってもいい。ある聖書学者にいたっては「独創性のない寄せ木細工的詩編」と酷評する人もおります。でも果たしてそうでしょうか。

なぜこの詩編を作った人は、多くの祈り、御言葉を集めて、一つの祈りとしたのでしょうか。でもこのことは信仰の経験上よく分かることだと思います。わたしたちも実は多くの祈りを集めて祈っているのです。祈りを真似ているのです。祈りを聞くと、その人の牧師の顔が浮かんでくるということがあります。いつも牧師の祈りを聞いているので祈りが似てくる。おかしいのは神学生によくあるのですが、自分の尊敬する牧師の祈りのくせや言葉遣いを真似して祈ることがあります。時々、わたしが「父よと呼びかけることを許して下さる神さま」と言いますが、それはわたしが東神大を卒業する時の学長松永希久夫先生がそのように祈っていたのを真似しているのです。でもその祈りも松永先生が誰かから真似したものなのかもしれません。そのようにして祈りの言葉は受け継がれていきます。

そしてもう一つ覚えたいのは、わたしたちは祈れないときがあるということです。この詩人は苦難の中にあります。そういう中では神さまに呼びかけることすらできない。皆さんもそういうご経験はないでしょうか。だから詩人は、他の詩編から祈りの言葉を借りてきて祈ったのではないか。自分の心に留まった珠玉の祈りを集める。その祈りの言葉に助けられて祈ることができたのではないのでしょうか。ある聖書学者は、それゆえにこの第86編の祈りは、祈りの模範、祈りのガイドになっていると述べています。珠玉の祈りの言葉を集めたゆえに、結果として祈りの傑作選のようなものに仕上がったのです。

本来わたしたちは祈れない存在なのではないのでしょうか。自分一人では到底祈れない。時に迷い、疑い、試練にある時は特にそうでしょう。ここに本質的な人間の姿があります。わたしたちは罪ゆえに祈れないのです。もともと神さまの形に造られた人間は、神さまに呼びかけ祈ることができる存在でした。しかしアダムとエバの失敗から人間はその関係性を失いました。神さまを呼ぶ特権を自ら放棄したのです。

けれども、そのわたしたちが再び神さまに呼びかけ祈ることができるようにされた。それがイエス・キリストの救いです。キリストが十字架においてわたしたちの罪を贖ってくださり、よみがえりの命をもって、わたしたちを御前に回復してくださいました。このキリストの救いによってわたしたちは神さまに呼びかけ、神さまがそれに応えてくださるという関係性が回復さ

れたのであります。その救いの道を神さまは開いてくださいました。「主よ、あなたの道をお教えください。わたしはあなたのまことの中を歩みます。御名を畏れ敬うことができるように、一筋の心をお与えください」（11節）この「道」は、神さまに通じる道、祈りが通じる道のことです。そこでわたしたちは主イエスが「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」（ヨハネ14：6）と言われたことを思い起こすのです。イエス・キリストという道によって、神さまに向かってまっすぐに延びるキリストという一筋の心の中で、わたしたちは祈ることができるのです。

今日は新約聖書でルカ福音書が伝える主の祈りのところを読みました。弟子たちが「わたしたちにも祈りを教えてください」（11：1）という部分は、今日の詩編にある「主よ、あなたの道をお教えください」にも通じるように思います。わたしたちは罪ゆえに祈りを知らない、祈ることができないのです。でもそのわたしたちに主イエスは「祈るときには、こう言いなさい」と言って主の祈りを教えてくださいました。「父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように」。今日の詩編にも「御名を畏れ敬うことができるように」（11節）「とこしえに御名を尊びます」（12節）とあります。わたしたちはイエス・キリストによって、この尊い神さまの御名を呼びかけ祈ることが許されています。本来そのようなものではないわたしたちが神さまに向かって「主よ、父よ」と御名を呼び、祈ることができる。それは大きな恵みではないでしょうか。それゆえにこの詩人は苦難の中でも、「心を尽くしてあなたに感謝をささげ」（12節）なのです。困難の中で、たとえ祈れない時も、主が祈りを導いてくださり、拙い祈りを御前に届けてくださる一筋の心を与えてくださいました。この恵みを感謝したいと思います。

最近、ある牧師から紹介されて三浦綾子さんの『祈りのことば』という本を手に入れました。三浦綾子さんは皆さんもご存知の『塩狩峠』や『氷点』で有名なクリスチャン作家です。20年ほど前に召されましたが、その作品は今も多くの人々の心をとらえています。その『祈りのことば』を読みながら、改めてこの人は祈りの人、信仰の人だったということをお教えられました。一つの祈りをご紹介します。

神よ、人生は一人、林の中を歩み行くようなものかも知れません。自分の前には何の道もなく、また自分の後をついてくる者もありません。そんな辛いものかも知れません。でも、どんな辛い道でも、主が手を引いて下さるなら、私たちは安んじて生きて行けるのではないのでしょうか。何十年間かの人生の中で、人は幾度、大きな重荷を肩に負い、おろし、また負って来たことでしょうか。でも主が共に在すならば、それは何と幸いな人生であることでしょうか。アーメン。